

01-021

ボンディングに影響を及ぼす周産期因子の検討—切れ目ない支援に向けた取り組みと今後の課題—

長岡 摂子

九州大学病院

1. はじめに 母親の生まれた赤ちゃんに対する情緒的な絆をボンディングと言い、ボンディング障害は児童虐待に発展する恐れがあると示唆されている。我々の先行研究の結果では、退院時と産後1か月健診時にボンディングに影響を及ぼす周産期因子として、精神科・心療内科受診歴、相談者の有無、経済的不安、未婚、初産などが明らかとなった。2019年12月の母子保健法改正において、産後ケアを必要とする出産後1年を経過しない妊産婦に対して、産後ケア事業が行われることになった。今回、産後ケア事業の一環として病院施設で行う、産後2週間健診時に視点をあて、ボンディングに影響を及ぼす周産期因子を明らかにしたので報告する。

2. 研究方法. 2018年7月1日～2019年3月31日にA病院で分娩した患者を対象とし、赤ちゃんへの気持ち質問票、エジンバラ産後うつ病質問票（以下EPDS）、育児支援チェックリスト（現子育て支援問診票）を用いて情報を得た。診療録より、母体年齢、分娩週数、胎数、健診受診状況、分娩方法、婚姻形態、妊娠中入院歴、経済状況、不妊治療、母体搬送、児の性別と出生体重、アプガースコア、児疾患、母児分離について調査した。 χ^2 検定、Mann-Whitney U検定を用い、p値0.05未満を有意差ありとした。B大学病院倫理審査委員会の承認を得た。

3. 結果 2週間健診時の赤ちゃんへの気持ち質問票の得点に影響を及ぼす周産期因子は、実母に相談できる、妊娠中の問題、経済的不安、妊娠期EPDS、退院時EPDS、2週間健診時EPDS、1か月健診時EPDSの7項目だった。今回新たに分かった周産期因子は、胎児や妊婦について医師から指摘された妊娠中の問題だった。

4. 考察 今回新たに分かったボンディングに影響を及ぼす周産期因子は、妊娠中の問題だった。今回の研究では妊娠中の問題に「現病歴や既往歴」「産科合併症」「胎児疾患」などが挙げられ、これは吉田のボンディング障害の要因で述べている不安やこどもの病気と一致する。現在行っている特定妊婦に対する外来からのプライマリーケア、妊娠期からの助産師外来の実施や精神科との連携など、妊娠中の問題に対する支援を行うことが重要であることを再認識した。しかし、A病院では助産師経験5年未満のスタッフが半数以上を占めており、統一したケアができるよう教育プログラムの構築に取り組み、妊産婦の支援の質の向上を目指していきたいと考える。

01-022

当院での多職種カンファレンスの取り組み

高村 恭子、奈良 圭子、須田 哲史、三浦 裕美子、桐林 美緒、米山 浩志

国家公務員共済組合連合会立川病院 小児科

【背景と目的】近年の児童虐待の増加により周産期メンタルヘルスケアの重要性が益々認識されている。心理社会的ハイリスク妊産婦を妊娠中から継続支援していく事は愛着形成の促進と養育環境の調整につながる。当院では平成31年1月から月1回多職種連携カンファレンスを実施している。メンバーは産婦人科・精神科・小児科の医師・助産師・看護師と薬剤師・医療ソーシャルワーカー・臨床心理士で構成されている。出産前後で外来及び病棟から依頼のあった症例を収集し、情報共有と意見交換を積極的に行うことで各家族への支援を具体的に評価検討している。今回私達はこのカンファレンス設立前後に当院で分娩を行った母親の症例を振り返り、カンファレンスが家族に与える影響と今後の課題について考えた。

【症例】母親は33歳。双極性障害の診断で13年前から炭酸リチウムを定期内服していた。平成26年2月、平成31年12月に当院で分娩を行った。平成26年第1子妊娠中の外来では特に介入が行われなかった。母親は自ら外部の妊娠と薬情報センターに相談し出産後完全人工栄養を選択した。在胎36週3日、2480gで出生した男児は生後数日哺乳緩慢がみられたがその後改善し日齢14に退院した。平成31年第2子妊娠の際には妊娠20週台から多職種カンファレンスで定期的に意見交換された。妊娠継続には母親の心身安定が優先される点とEbstein奇形の合併症を考慮すべき点をふまえ、外来で定期的に母親と面談が行われた。母親は第1子に心奇形の指摘がなかったことから従来通りの内服継続を希望した。それを受け、母親と新生児の血清リチウム濃度がほぼ同程度である点を考慮し、妊娠中定期的に血中モニタリングの方針となった。第2子是在胎38週5日、2790gで出生した男児で高ビリルビン血症で日齢3～5に光線療法を受けた以外は経過良好であり日齢7に退院した。日齢4に循環器外来を受診したところ、軽度のEbstein奇形を指摘され6ヶ月毎の定期観察となった。家族の受け入れは非常に良好であった。第1子の分娩が日勤帯であったのに対し第2子の分娩は準夜帯で人手が少ない時間帯であったがカンファレンスからの申し送りにより混乱なくNICUに入院管理となった。退院へ向けての地域連携もスムーズであった。

【まとめ】増加傾向をたどる心理社会的ハイリスク妊産婦を体系的に支援する為に設立した当院の多職種カンファレンスについて実際の症例を基に振り返りを行った。